

注文の多い料理店

宮沢賢治

ふたり わか しんし
二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする
てっぽう しろうま いぬ に ひき やまおく こ は
鉄砲をかついで、白熊のような犬を二足つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさ
かさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。

「ぜんたい、ここの山は怪しからんね。とり けもの いっぴき い
でも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

しか き よこ ばら に さんばつ み まい つうかい
「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずいぶん痛快だろ
うねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろうねえ。」

それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまご
ついて、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のような犬が、二足いっしょに
めまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

「じつにぼくは、に せんよんひゃくえん そんがい ひとり しんし いぬ ま
「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」と一人の紳士が、その犬の眼ぶたを、
ちょっとかえしてみてもいいました。

「ぼくはに せんはっぴゃくえん そんがい
「ぼくは二千八百円の損害だ。」と、もひとりが、くやしそうに、あたまを
まげていいました。

はじめの紳士は、しんし かお わる しんし
はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もうひとりの紳士の、
かお み い
顔つきを見ながら云いました。

「ぼくはもう^{もど}戻ろうとおもう。」

「さあ、ぼくもちょうど^{さむ}寒くはなったし^{はら}腹は^す空いてきたし^{もど}戻ろうとおもう。」

「そいじゃ、これで^き切りあげよう。な^{もど}あに^{きのう}戻りに、^{やど}昨日の宿屋で、^{やまどり}山鳥を^{じゅう}拾^{えん}円^かも^{かえ}買って^{かえ}帰ればいい。」

「^{うさぎ}兎も^{けっきょく}でていたねえ。そうすれば^{かえ}結局おんなじこった。では^{かえ}帰ろうじゃないか」

ところがどうも^{こま}困ったことは、ど^いっちへ^{もど}行けば^{けんとう}戻れるのか、い^{けんとう}っこうに見^{けんとう}当^{けんとう}がつかなくなっていました。

^{かぜ}風がどうと^ふ吹いてきて、^{くさ}草はざわざわ、^こ木の^は葉はかさかさ、^き木はご^なとんごと^なんと^な鳴りました。

「どうも^{はら}腹が^す空いた。さ^{よこ}っきから^{ばら}横^{いた}つ^{いた}腹が痛くてたまらないんだ。」

「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あるきたくないよ。あ^{こま}あ^な困ったなあ、何^なかたべたいなあ。」

「^た喰^たべたいもんだなあ」

^{ふたり}二人の^{しんし}紳士は、ざわざわ^な鳴る^なすすき^いの中で、^いこんなことを^い云いました。